

市政「経営」の
行き詰まりあきらか

市民生活に寄り添った市政運営を

充分な受け皿がないままに人口が急増している流山市。要望が多様化し、急増しています。そんな中、昨年10月市議会つくばエクスプレス沿線・新川耕地整備特別委員会（委員長小田桐たかし議員）は、おおたかの森駅周辺の区画整理事業を施行しているUR都市再生機構に要望書を提出しました。

受け皿なき開発・住民誘致に未来はない

1999年に始まったおおたかの森駅周辺の住宅開発。街の構造が変化し続けています。

前市長の市政運営を批判し就任した井崎市長でしたが、住民誘致型の大規模開発は温存。市政「経営」を掲げ、開発推進の『起爆剤』を次々打ち上げますが、課題が噴き出しています。

■校庭が広がった小山小学校は、「非効率」と、駅前から離し、墓地の上に移転。低層校舎の導入、児童館などを複合化させました。

しかし、児童の急増に追いつかず、校舎や学童クラブの増築や学区変更が相次ぎ、子どもの生活や人間関係、学校生活等への影響は否定できません。

■セントラルパーク駅前の市有地（約3千坪）に私立幼稚園・小学校（インターナショナルスクール）を誘致。50年間もの長期賃貸契約を結び、賃料は2分

の1に減額しました。

しかし、授業料が高く市内利用者には伸びず、しかも駅前でも商業出店が少なく、『賑わい』をうみだせていません。

■2つの新設小学校、1つの新設中学校の建設計画を縮小。3校分の用地購入を取りやめ、併設校に集約させました。

しかし、児童生徒の急増で、18教室分のプレハブ校舎を増築。さらに新設校用地もなくなっています。

■おおたかの森駅前の市有地（約3千坪）にホテルを誘致し、マンション業者に公共施設（市民窓口センターなど）まで造ってもらう計画を導入しました。

しかし、学校や保育園だけにとどまらず、保健センターや児童館、福祉会館、図書館などの不足には手が付けられておらず、上下水道の経営も先行き不透明感が高まっています。

失政のツケを市民にまわすな

井崎市政は、人口急増と福祉の増進に対する真摯な姿勢はもっています。「人口減少時代の到来」を理由に失政のツケを誤魔化そうしていますが、市民

の世論と運動には敏感です。

障がいのある無にかかわらず、子どもからお年寄りまで「住んで良かった」と実感できる流山をご一緒につくりましょう。



市議

小田桐たかし

